事業報告

都市間交流事業
コア事業

1

事業報告 | コア事業 1

塩田千春展 巡る記憶

開 催 日／2022年8月5日(金)～10月16日(日)
会　　場／別府市中心市街地(新中華園ビル 1階、BEP.Lab ほか)(別府市)
来場者数／16,274人
主　　催／混浴温泉世界実行委員会、
　　東アジア文化都市2022大分県実行委員会

4

糸がつなぐ記憶を巡る空間芸術

別府の大地から湧き立つ湯煙を見て、強い生命力を感じた―。

ベルリンを拠点に国際的に活躍する現代美術家の「塩田千春」。今回の個展では、別府に生きる人々の"記憶"から着想を得て、今は機能していない卸問屋や中華料理店だった店内に宿る記憶を糸で紡ぐ大規模な２つのインスタレーションが発表されました。

元卸問屋「BEP.Lab」では、「循環」というテーマを、縦横無尽に空間を絡み合う白い糸と、それをつたって落ちる水滴で表現。「新中華園ビル1階」では、中華料理店時代に使っていたテーブルや食器を赤い糸で天井からつるし、かつての店の活気を彷彿とさせる躍動感を表現しました。生と死、存在、記憶など人間の根源的な問いをテーマにした塩田千春氏の作品は、その場所の「記憶」でありながら、見る人それぞれに残る思い出を呼び起こすもので、来場者は、繊細かつインパクトのある空間芸術を堪能することができました。

Chiharu Shiota Berlin 2020 Photo by Sunhi Mang

関連イベント

塩田千春展『巡る記憶』開幕記念トーク

開催日／ 2022年8月5日（金）
登　壇／塩田千春
進　行／山出淳也（混浴温泉世界実行委員会
　　総合プロデューサー、
　　Yamaide Art Office 株式会社 代表取締役）
会　場／別府ブルーバード会館 3階 フレックスホール
　　（別府市）

1～3
塩田千春
『巡る記憶 - 草本商店』
2022
©JASPAR, Tokyo, 2022 and Chiharu Shiota
撮影：サニー・マン
©混浴温泉世界実行委員会

4～6
塩田千春
『巡る記憶 - 中華園』
2022
©JASPAR, Tokyo, 2022 and Chiharu Shiota
撮影：サニー・マン
©混浴温泉世界実行委員会

KIM KIBUM

〈慶州市〉招聘作家／KIM KIBUM（キム・キボム）

滞在期間／2022年9月8日（木）
～10月11日（火）

| 事業報告 | コア事業 2

アーティスト・イン・レジデンス

主 催／混浴温泉世界実行委員会、
東アジア文化都市2022大分県実行委員会

CHEN ZHUOYI

〈温州市〉招聘作家／CHEN ZHUOYI（チェン・チュオイー）

滞在期間／2022年10月26日（水）
～11月30日（水）

中韓のアーティストが描く大分の印象

国内外のアーティストが町や地域に滞在し、人々との交流の中で様々なインスピレーションを受けながら創作活動を行う「アーティスト・イン・レジデンス」。本事業では韓国、中国の交流都市出身のアーティストを別府市に招き、それぞれ約1か月にわたって、地域住民や地元アーティストとの交流を深めながら、作品制作に取り組みました。作品完成後には、「滞在成果展」を開催し制作工程と完成品を展示しました。

慶州市出身のキム・キボム氏は、滞在中に開催したワークショップや訪問先の施設利用者などが描いた作品と自身が描いた作品を組み合わせ、「10年後の記憶」という作品を制作。キム氏は、滞在中に感じた別府市や大分県内の印象について、溶岩や湯けむりを黄、山を緑、海を青で表現。さらに、強く印象に残った韓国にはない黒い外壁の家にヒントを得て、文化を通じた国際交流や相互理解、価値観の共有を進める東アジア文化都市事業の取組をたくさんの色を混ぜ合わせてできる黒で表現しました。

温州市出身のチェン・ヂュオイー氏は、コンクリートと竹を使い、異なる性質の2つの素材を組み合わせることで、別府の規則的な町並みから感じた「冷たさ」と、別府に暮らす人々の「温かさ」の対比を、「別府印象」というタイトルで制作。初めて扱った竹は、別府市の竹藝家のこじまちから氏に手ほどきを受けました。

【慶州市】KIM KIBUM（キム・キボム）

制作作品／絵画（作品テーマ「10年後の記憶」）
滞在中に開催したイベントや蒲江児童館（佐伯市）、すくすく・いきいき村（大分市）の施設利用者とコラボレーションした作品を制作。
地域交流／2022年9月20日（火）ワークショップ（蒲江児童館）、23日（金）ワークショップ（別府市：アソビlab）、23日（金）～25日（日）オープン落書きDay!（アソビlab）、26日（月）ワークショップ（すくすく・いきいき村）、10月8日（土）まつばらマルシェワークショップ（別府市：松原公園）、9日（日）・10日（月）オープンスタジオ（アソビlab）

【温州市】CHEN ZHUOYI（チェン・ヂュオイー）

制作作品／竹を使用した作品（作品テーマ「別府印象」）
地域交流／2022年11月9日（水）県内アーティスト等との交流（大分市：大分県立芸術文化短期大学、豊後大野市：オレクトロニカアトリエ、朝倉文夫記念館）、27日（日）オープンスタジオ、アーティストトーク（アソビlab）

滞在成果展

関連イベント

アーティスト・イン・レジデンス 滞在成果展

開催日／ 12月10日（土）～ 18日（日）
会　場／トキハ別府店 西館２階（別府市）
来場者／ 304人
完成した作品を展示。1か月の制作の成果を多くの人に鑑賞していただきました。

キム・キボム氏
「10年後の記憶」

たくさんの人たちの思い思いのデザインと、キム氏のデザインが融合した作品に。

チェン・ヂュオイー氏
「別府印象」

別府市のスタジオ「SynergieZ（シナジーズ）」にて制作。竹とコンクリートを使ってチェン氏にとっての別府の印象を表現。

事業報告 | コア事業 3

大分アジア彫刻展 紹介展

温州市
開 催 日／2022年10月15日（土）～11月13日（日）
会　　場／温州博物館（中国温州市）　来場者数／15,674人

慶州市
開 催 日／2022年９月16日（金）～10月10日（月）
会　　場／慶州世界エキスポ公園内文化センター（韓国慶州市）
来場者数／17,877人

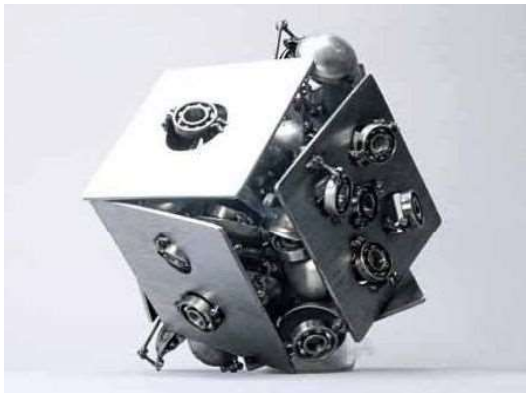
主 催／大分アジア彫刻展実行委員会、
東アジア文化都市2022大分県実行委員会

大分に集った新進気鋭作家の彫刻が初めて海外へ

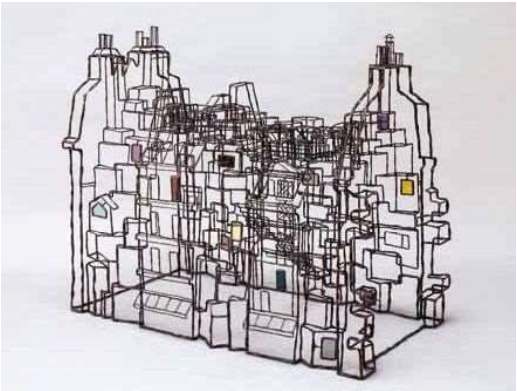
近代日本彫刻の基礎を築いた大分県出身の彫塑家 朝倉文夫の偉業を顕彰し、ビエンナーレ形式で開催している「大分アジア彫刻展」。過去の入賞作品を展示する紹介展を海外で初めて開催しました。アジア各国の新進彫刻家の作品が鑑賞できる貴重な機会とあって、各会場とも連日、多くの方が来場し、豊かな表現力を持った個性あふれる作品に見入っていました。

下平 知明
「夜」(2016年 大賞)

給田 麻那美「The Birth」(2018年 大賞)

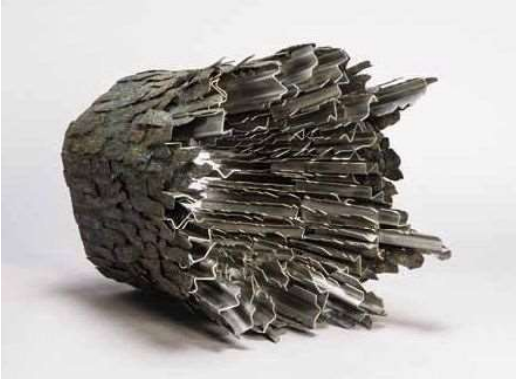


Surachai DONPRASRI「THE DICE」(2012年 優秀賞)



MO Junseok「The unfillable wall」(2018年 優秀賞)

Pattarajarin FAKPHOU「Quiet Place」(2020年 優秀賞)



森　貴也「回帰」(2010年 優秀賞)

事業報告 | コア事業 4

DRUM TAO
日中韓交流フェスティバル

開 催 日／2022年10月22日(土)・23日(日)
会　　場／野外劇場 TAOの丘(竹田市)
来場者数／2,182人
主　　催／一般財団法人TAO文化振興財団、
東アジア文化都市2022大分県実行委員会

久住高原の秋空に響くアジアの音色

国内にとどまらず、海外にも活動を広げ、世界が認める和太鼓演奏集団「DRUM TAO」。阿蘇くじゅう国立公園内の標高1,036mに位置する舞台「TAOの丘」で雄大な阿蘇五岳を借景に、DRUM TAOと中国・韓国の交流都市から招いた伝統楽器奏者とのスペシャルコラボレーションが実現。青空にこだまする幽玄な音色と迫力の和太鼓に酔いしれる空間は客席とも一体化し、連帯感と感動に包まれるひとときでした。

出演者同士も、「音楽により言葉の壁を超え、“友情”を育むことができた。また共演しよう」と熱い約束を交わしました。

ライブイベントに合わせてマルシェも開催

〈出演アーティスト〉

日本：DRUM TAO
中国：中国華樂団（鄭字／揚琴　王晶／二胡　鮑捷／琵琶　姜小青／古箏）
中国：許可／二胡、山本祐ノ介／チェロ
韓国：慶州市立新羅鼓吹隊（サムルノリ、ソゴ舞）

揚琴：鄭字氏

古箏：姜小青氏

サムルノリ：スンウォン氏

（左）二胡：許可氏　（右）チェロ：山本祐ノ介氏

事業報告 | コア事業 5

日中韓現代作家交流展 in OITA 2022

開 催 日／2022年10月26日（水）～11月6日（日）
会　　場／大分県立美術館 1階 アトリウム 及び 3階 ホワイエ（大分市）
来場者数／16,064人
主　　催／大分県民芸術文化祭実行委員会、
東アジア文化都市2022大分県実行委員会、大分県、文化庁

トークイベント

それぞれの地域の風土と文化をデザインで体現

「都市」「生活」「交流」をテーマとし、大分県在住の芸術家や中国・韓国の現代作家らが手掛けた作品から、大分の美術状況の「今」と多様化する現代アートの側面を紹介する「日中韓現代作家交流展」。

会場となった大分県立美術館1階アトリウムには、社会的メッセージを込めた映像や立体など、中国・韓国の現代作家の作品とともに、大分を拠点に活動する若手現代作家(安部沙保里氏、遠藤ももこ氏、オレクトロニカ、金村孝之氏、ザ・キャビンカンパニー、北村直登氏、野村菜美氏)の作品が競演しました。3階ホワイエでは、県内の伝統工芸品として発展しつつ、現代的な造形作品としても国際的な注目をみせる大分県在住の竹工芸家(杉浦功悦氏、中臣一氏、横山修氏、米澤二郎氏)の作品が展示されました。作品の鑑賞や作家との交流を通して、国際交流と相互理解、価値観の共有を進めました。

関連イベント

トークイベント
カイコウ-Encounter Our Lives-

開　催　日／2022年11月3日(木)
登　壇　者／安部沙保里、オレクトロニカ、金村孝之、
　　ザ・キャビンカンパニー、北村直登、野村菜美
来場者数／81人

ギャラリートーク

開　催　日／2022年11月5日(土)
オンライン／中韓作家：ツァオ・フェイ(中国)、ホン・ソンミン(韓国)
登　壇　者／竹工芸家：杉浦功悦、中臣一、横山修、米澤二郎
来場者数／35人

ギャラリートーク

北村 直登「東アジア文化都市(大分県、温州市、済南市、慶州市)」2022

金村 孝之「すべり台の下の囲まれた大地」2019

事業報告 | コア事業 6

別府アルゲリッチ音楽祭 シンポジウム

「Change The World～新しい社会の創造にむけて～」

開 催 日／2022年12月3日(土)
会　　場／しいきアルゲリッチハウス(別府市)
来場者数／199人(オンライン69人)
主　　催／公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団、
東アジア文化都市2022大分県実行委員会

芸術は人をつくり、社会をつくる

クラシック音楽の殿堂「しいきアルゲリッチハウス」において、芸術文化による新しい社会の創造をテーマに開催された「別府アルゲリッチ音楽祭シンポジウム」。

第1部では、艶やかで生き生きとした音色を奏でる気鋭の若手サクソフォン奏者 上野耕平氏の演奏で会場を盛り上げていただきました。第２部では、芥川賞作家でクラシック音楽にも造詣が深い、平野啓一郎氏による基調講演を開催。平野氏は、自身の大分県での思い出やマルタ・アルゲリッチ氏とのつながり、音楽や文学が与えてくれる力を都市同士で共有し、発展させていくことの重要性などを語りました。第３部のパネルディスカッションでは、(公財) 文字・活字文化推進機構の町田智子氏の司会のもと、３名のパネリストにより、別府アルゲリッチ音楽祭が始まった経緯や大分県でこの音楽祭が行われる意義、コロナ禍を経験し、一流の生演奏に触れることの大切さなど、活発な意見交換が行われました。芸術文化の役割や音楽祭の意義など、芸術活動の本質について深く考える時間となりました。

PROGRAM

サクソフォン・ソロ・リサイタル
上野耕平（サクソフォン）

基調講演「今、芸術に期待し得ること」
平野啓一郎（小説家）

パネルディスカッション
「コロナ後の“新しい社会の創造”に向けた音楽など芸術文化の役割と活用について」
・モデレーター
町田智子（(公財) 文字・活字文化推進機構 専務理事、日本ニュース時事能力検定協会 理事）
・パネリスト
山内千鶴（日本生命保険相互会社 顧問）
大津良夫（(公財) 水戸市芸術振興財団 常務理事、水戸芸術館 副館長）
伊藤京子（(公財) アルゲリッチ芸術振興財団 副理事長、別府アルゲリッチ音楽祭 総合プロデューサー）

基調講演 平野啓一郎氏

サクソフォン・ソロ・リサイタル 上野耕平氏

パネルディスカッション

写真すべて ©脇屋 伸光

After talk 03
2022 Oita

Column

別府の湯煙のように循環し続ける人々の記憶

別府の大地から湧き出る湯気を見て、「大地は生きているんだ」と、その生命力に感動して、人間中心の生活から離れようと思ったんです──。

初めて草本商店に入った時に、そこに人々の思い出や記憶がたくさん詰まっていると感じて、ここで展示をしたいと強く思いました。部屋全体を覆う、湯煙を想像して使った白い糸から水がポタポタと垂れる様を見て、「これは雨漏りなのか」「水は、どこから出ているのか」「不思議だな」と思うところから「どういうコンセプトでこのアーティストは作品をつくったのだろう」と、その世界に入ってもらえれば、「アートっておもしろい」というところにつながるのではないかと思います。

新中華園ビルは、コア事業の「巡る記憶」のタイトルにぴったりの場所でした。テーブルだったり、お皿だったり、中華料理店が現役だったころのものが捨てられずにずっとそのままになっている様子に惹かれ、赤い糸でつないで作品にしました。それを見た当時のオーナーの方から「ここが生き返ったように見える」と言われ、生きている状態を表現したかったので、本当に嬉しく思いました。

現代美術は「難しい」とか「わからない」とか言われるのですが、ごく普通の日常を語っていることが多いです。それに少し興味を持つことで、普段の生活にユーモアが生まれ、楽しく感じられるのではないかと思います。

今回の別府の展示で、たくさんの人とつながることができ、思い出深い作品になりました。

塩田千春
Chiharu Shiota

※2022年8月5日（金）に開催した関連イベント「塩田千春展『巡る記憶』開幕記念トーク」より、一部抜粋

Chiharu Shiota Berlin 2020
Photo by Sunhi Mang